

# ・自選五十首・



## 山埜井喜美枝

やまのい・きみえ 1930年、中国・旅順生まれ。敗戦後、母の故郷である大分県に帰る。56年、「未来」に入会し、一時、東京で生活。75年以降は福岡に拠点を移す。81年、同人誌「颯」を創刊。歌集は『やぶれがき』『呉藍』『歩神』ほか、多数ある。

振り向けば街のネオンの明るくて平衡感なく突堤に立つ

簡潔に愛の言葉は告ぐるべし朱の帯固く締めて出でゆく

長き脚輝き駈けてくる少女その膝を誰のためにも折るな

ものかけ秋となりたる土の上詩は死と思うまでに親しも

クサンチツへの如くにわれを言いなせし人去りゆきて秋ひとりなる

海の辺の此処も仮棲み還るべき海彼の陸はいま花の季

浄からぬ思ひといへどよしゑやし戻ることなき朝川渉る

表札をあげぬ女のひとり住み魔除けの鈴のいで入りに鳴る

寢室の襖の外に足音して乙の子はまた覗きゐるらし

三年にみたび姓変ふヨハネ・阿難・顔回ほどに愛さるるなく

をなごには思ひ及ばぬ終のさまからくれなるの市ヶ谷の秋

「やぶれがき」

「多多良」

「呉藍」

「東京に出て文学をやりたい」——こうして文字にしても、口にしても笑われそうであるが、当人はこのうえなく真剣。やはり東京なのか、と納得して送り出した私も、仕事が残っているという知らせに後を追った。棚無し小舟に大海をゆくごとき十二年が過ぎた。

私の歌集出版の手続き一切をすまずと、上京した時同様「先に帰る」とその人は、九州に帰って行った。やがて出来あがった歌集と共に、私も東京を去ることになった。「歌集を出して上京する人はいるけれど……」と呆れられながら、やさしい〈未来〉の人達が送る会を開いてくれた。人馴れない私は、ただどりのぼせていたと思うが、(山崎) 方代さんが大きな羊羹を一棹、はにかみながら渡

永久に地に降るすべからず春日さす園の鞦韆の幼児の足

直截の喩は息づけりをみなごの大根根白の白き腕たまたま

自らを縛らむとして帯締を啜へ後姿を鏡に写す

ひな緋桃菱はなびらの餅ありてああ太平に倦みたり 男

さくら憎し西行憎しさらさら去りゆくものを追はじ女は

磔刑のイエスを仰ぐダリの妻ポールエリユアールの妻たりしガラ

ぬばたまのやみの深井といはば言へ三十日三十夜はわがもとにこそ

僅少差 否 鼻の差の具体もて辛くも勝つといへど勝ちたり

地の息に吸はるるごとくも高処より藤はむらさきの花房を垂る

匂はしく老いたきものよ白髪に春はさくらの小紋など着て

尊菜のごとく肌にまつはりて見えざる母の目はわれを追ふ

みどり児の腿のごとかるハムを切るゾリンゲンの薄き刃をたのしびて

歌詠みてただ一刻みあがりたる源三位頼政 汝も男よ

還暦を過ぎたる昭和 生ひ更り生ひたけて疲る青人草は

湯上がりをつるりとなれる人の顔しみじみとして人の顔愛し

往きて旅帰りても旅ふくれつつ振れつつ水光る河口

名告りして軍書より起ちあがる老武者の首稚児の細首

汗ばみて夢より覚めぬこれの世をいささか遠出してゐたるかも

鯛たうを食ひたる口を拭ひつつ書きたらむ「いづれのおほむときにか」

〈統一〉をワインに祝ふさりながら国の名ひとつ地図に消えたり

「六花」

して下さったのと、二次会会場から小中（英之）さんが、私の荷物を持って小田急線の終電にいっしょに駆けこんでくれたのを、忘れない。お二人とも今はもう、亡き数に入られたことも、一入感慨深い。

近藤（芳美）さん（当時、〈未来〉では近藤先生と呼ばせない、呼ばない、不文律のようなものがあつた）は、「やぶれがさ」という題名を良しとされ、序文の最後に「自身の人生と文学との、逃れられない決意の楔くわとなることを期待したいと思う」と、書いて下さった。

〈未来〉に入会して十八年、一九七四年、出立への励ましと、送る言葉をいただいで九州に帰ったが、待っていてくれたはずの人は、一年後、私を去って行つた。

小舟は転覆したが、執念しつねく生き残つた私は三年後、久津晃と家庭を持つことになった。若い時の歌仲間とのその後は、私にとつて恵まれた日々であつた。

一九八一年、小さな同人誌として出発した「ひす颯」も今年八十号となつた。

近藤さんの励ましの「決意」などと、立派な志はなかつたが、私は歌を捨てられず、歌もまた私を見捨てず今日に至っている。記すには面映おもゆいが、歌に支えられて来た歳月を私はしみじみ有り難いもの思っている。

「火渡り」

かひやぐら立つひむがしの蓬萊に漕ぎ出でし者ら行き方知れず  
不束な娘にてありし幸ひや迷へる妣がわが辺を去らぬ

心ならずも人に飼はるる不機嫌をあらはに水をすべる白鳥

下蔭に憩ふ口中ほの甘し駒込お富士さん縁日の鮎

若氣のいたりと言はるるほどのことまだふたつみつあつても なう

惜しみなき真日の光にあやされて喘紅の蕾ほぐるる

紅旗征戎さくら前線はな前線男は軍立ちて死ににき

徳儀にくびすからがらかかりるる残生といふ日日をたのしむ

一寸のたましひ宿す五分の虫あまれる五分を地に曳きて這ふ

さやらさや福もたらすと風に鳴る小笹を肩に人ら行き交ふ

「形神」

白妙の雪降り積める陸奥みちのくみちの国にあくがる

寒中の身の養ひにとうろとろ女正月のおかゆさん炊く

身の毒の夜更し珈琲けむりぐさそこばくの酒 この世たのしも

いまだ信じきれぬ男にあやさるることしもファックスの紙吐く音は

冬土に鋭きみどり群立ちて森侍者のごとき水仙花咲く

ともし火の明石桜鯛かぶと蒸し緒を締むる間もなき負けいくさ

時と時間少しずれつつわれを過ぐおぼろの月のはなの下びに

都市の空黒くおほふ日近からむ賢しく肥る「喪服の鳥」ら

咲く花は五分こそよけれ身のうちに残れる五分の力にほふ